



世田谷一家殺人事件 侵入者たちの告白

齊

藤

寅

草思社

世田谷一家殺人事件

2006 © Shin Saito



著者との申し合わせにより検印廃止

2006 年 6 月 28 日 第 1 刷発行

著 者 齊 藤 寅

装丁者 前 橋 隆 道

発行者 木 谷 東 男

発行所 株式会社 草 思 社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8

電 話 営業 03(3470)6565 編集 03(3470)6566

振 替 00170-9-23552

印 刷 株式会社三陽社

カバー 株式会社大竹美術

製 本 大口製本印刷株式会社

ISBN4-7942-1502-9

Printed in Japan

世田谷一家殺人事件

侵入者たちの告白



草 思 社

カバー写真◆大 西 清 和
地 図 作 成◆アートライフ

世田谷一家殺人事件——侵入者たちの告白* 目次

第1章 膨大な遺留品 17

第2章 クリミナル・グループ 35

第3章 消えたベトナム人 42

第4章 メンバーとの接触 63

第5章 曾根崎風俗嬢殺し 87

第6章 狙われた身元引受人 102

第7章 犯罪ネットワーク 118

第8章 一致した指紋 147

第9章 決定的証言 159

第10章 二〇〇〇年十二月三〇日 175

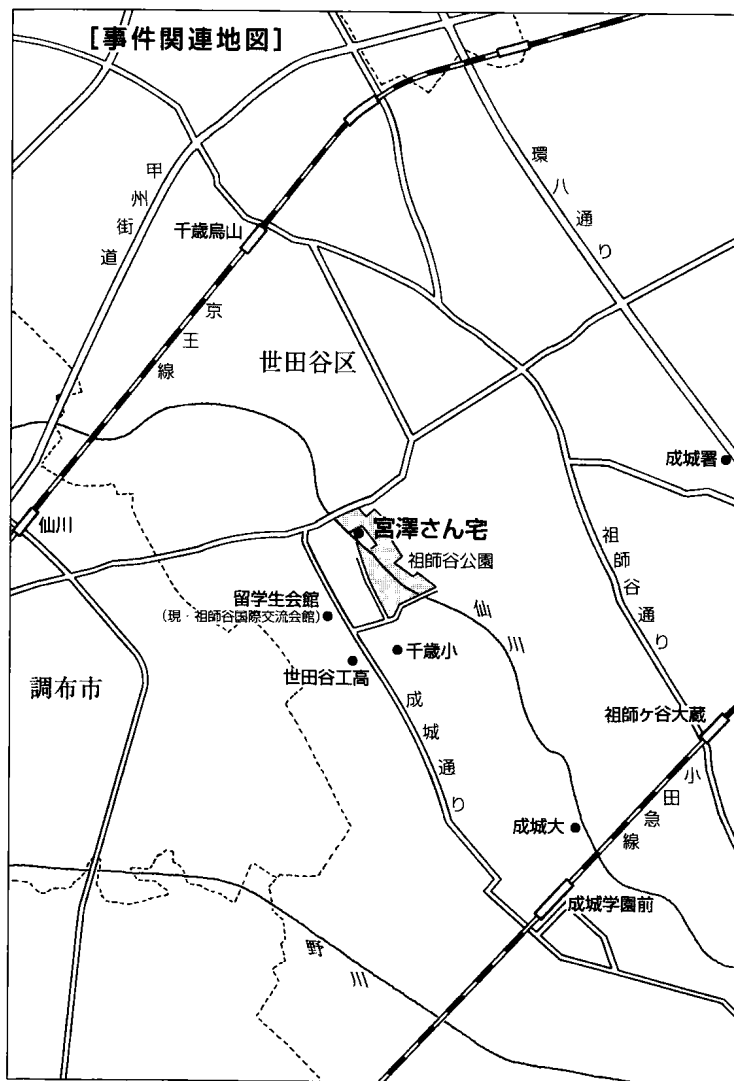
第11章 知りすぎた者たち 199

第12章 次のターゲット 211

第13章 写真入手 222

第14章 夜の訪問者 240

エピローグ 250



世田谷一家殺人事件——侵入者たちの告白

捜査関係者のなかには、私が導きだした結論を一笑に付す者がいるかもしれない。だが、私は知っている。事件直後、捜査に協力しようとした一民間人の情報を、傲慢で図体ばかり大きい警察機構が黙殺したことを。そればかりではない。善良なる一市民であったその人物は、なんと組織捜査のなかで犯人視までされたのである。

私は事件発生直後から、大きな組織捜査のなかで埋もれていった細かな事実をも含め、十分な時間をかけ、丹念に取材、探索したものを本書にてすべて積みあげた。なお本文中に登場する人名等は適宜仮名とした。

プロローグ

私はある夜更けに、足下から忍び寄る寒さと戦いながら、歩いていた。静まりかえった住宅街ではあるが、二三区内というのに、なぜかその往来は不気味だった。コツコツと響く己の足音に、たびたび振り返らなければならないほどであった。あの夜、「訪問者」たちは、この往来を忍んで行つたにちがひなかった。この先にある、あの家を目指して……。

二〇〇〇年の暮れ、この家の主であつた宮澤みきおさんと幼児二人を含む一家四人が何者かによつて惨殺されるという凄惨な事件が発生した。世紀末の日本を震撼させた世田谷一家殺害事件である。

うそ寒い思いを泳^{こら}えながら小さな疎水沿いの歩道をしばらく歩くと、街路樹の隙間からあの家の白い壁が見えた。私は、そこにたたずんで、しばらくその家を凝視した。あの夜、この場所で、「訪問者」たちも、決行までの時間を費やした。あたりは寂としている。沈黙がかえつて私の耳を劈^{つんざ}いていた。あの晩もおそらく同じような静寂がここに沈着していたにち

がない。

ふと、私のまわりの空気が動いたような気がした。殺気。それも物の怪の……。私の心はたちまち凍りついてしまった。その空気の動きはたしかに「訪問者」たちが放っていたものと同じだ、と直感が奔^{はし}った。全身の表皮が粟^{あわだ}立った。

二〇世紀末、突然、発生した世田谷一家殺害事件の舞台となった家に、私は何度となく足を運んだ。私は、そこに行くたびに、例外なく同じ恐怖を身に染み込ませなければならなかった。必ずその場所で、「訪問者」たちの気配を感じた。たしかに衝撃的な事件ではあったが、私はその先、これほど長く、この事件にかかわろうとは思ってもいなかった。

「なぜ、うちの子たちが……」

老母は言った。

「なぜ、うちの子たちだけがあんな仕打ちを受けなければいけなかったのでしょうか？ 私には全然わかりません……。もう私には口をきく元氣もありませんから……。私のほうが先に逝くはずだったのに……。」。そのあとは喘^{あえ}いでしまつて、言葉は続かなかった。

それはまさしく「鬼の言葉」だった。このまるで魂から直接絞りだされたような言葉を唐突に投げかけられた私は、名状しがたい憤りが湧きあがり、体のなかでバウンドを繰り返し、やがて突き抜けていったことを感じていた。

私なりにこの事件の解決の道を探らなければならない。できる最大限の努力をして、どこかで笑っているにちがいないホシを見つけたさなければならぬ、そう決心していた。

埼玉県浦和市（現さいたま市浦和区）のやや北東部に位置する住宅街にその家はあった。そこにはいずれも建坪面積はそう広いとはいえない家々が、犇（ひし）めきあうようにして立て込んでいた。そのなかのごくごく平凡な和洋折衷の二階家。そこがその家であった。

私はまだ寒さが抜けきらない二〇〇一年二月のある晩、その家を訪ねた。近くに停めた車から降り、コートの手をすぼめながらその家をやつとの思いで探し当てた。やけに寒い晩だった。これだけ多くの家が立ち並んでいるにもかかわらず、あたりは静まりかえっている。ただ、その家を除いて、ほとんどの家屋からは光が漏れていた。

表札はなかったが、住居表示ですでに確認している。プザーの類は意図的にとり除かれたと思われる。木目調のコーティングがなされたベニヤ製の玄関ドアをノックした。ドアの上部には横に細長い磨（す）りガラスがはめ込まれている。

「やっぱりいないか……」。少々の落胆と寒さを感じながら、私は上着の左ポケットをまさぐって名刺入れをとりだした。そうしてなから一枚の自分の名刺を引き抜いて、裏に一筆書くための下敷きになるような場所を探した。

そのとき、私がノックしたばかりのドアの磨りガラスにボオツと薄明かりが灯った。私は

間髪入れずにドアの内側に向かってこう告げていた。「宮澤さんのお宅ですか？ 夜分、たいへん申し訳ありません……。少々、お話を伺いたいと思ひまして……」。もちろん、最初に私の名前と職分は告げている。

音もなくドアが開いた。ただし、それはほんの数センチである。ドアを開けてくれた家人はとにかく驚くほど痩せていた。私は一瞬言葉を失った。迎えた家人が痩せていたせいばかりではない。私が予想していた人ではなかったからだ。「この人は？ お父さんが必ず応対するはずだが……。まさか、お母さん？」

ドアを細く薄く開けて私に対応しているのは、たしかに年老いた女性である。私は、自戒の欠片が多少は頭をよぎったものの、最初これを僥倖と思った。なぜならこの「お母さん」とおぼしき人は、あの忌まわしい事件が起きてからというもの、シヨックで倒れてしまい、一時は生死の境を彷徨うまでに深刻な状態に追い込まれた、といわれていたからだ。しばらくして最悪の状態からは辛うじて脱けきったらしいが、その後はまるで生気が抜けてしまつて、人前に出るなどということは不可能、とされていたのだつた。

そんな彼女の状態を見た家族以外の第三者はいないわけで、そこに多少の尾緒おひれがついている可能性は否めないが、事件発生当時から現在にいたるまで、被害者家族のスポークスマンというような役割を担っている「お父さん」がそのようなニュアンスのことをマスメディアに言っていたから、そんなに大きくかけ離れていないはずだつた。お父さんにしてみれば、

憔悴しきって生死のあいだを歩きつ戻りつしている妻を容赦なく押し寄せるマスメディアから守ろうという切実なる思いだったのだろう。

たしかにその際の「お父さん」の姿は凄絶の一言であつた。地獄のような事件に巻き込まれた息子一家にたいする悼^{いた}しみも悲しみも、また犯人にたいする憎悪の思いも一切見せずに波状的に押し寄せるマスメディアの取材攻勢に、たった一人で立ち会っていた。自宅には妻が生きた心地もないような状態で床に伏している。それを知っていてもマスメディアは取材を繰り返した。新聞、テレビ、週刊誌などに始まって、あらゆる刊行物のそれぞれの取材者たちが、浦和市（当時）にあるこの家に黒山の人垣をつくった。

それを押しとどめるための術を何一つもっていない、それでも「お父さん」はこの不条理な嵐に耐えていた。そのような状態の間隙を縫うように私はその家を訪れた。もちろん、この家の現状は充分すぎるほど知っていた。私にしたって、この事件の取材者の一人だったのだ。その私の前に、取材者に応対するはずもない、いや、応対すべきではない「お母さん」が、ドアを開けている。

〈独占告白 世田谷一家殺害事件被害者の母がはじめて語った！〉こんな浅ましいタイトルが瞬時、私の頭に去来した。このタイトルこそ、マスメディアに携わる者がもつ功名心のなれの果て、あるいは象徴である。そんなことを瞬間、頭のなかで弄^{もてあそ}んだあと、私は、すかさずこう言っていた。

「あの、宮澤さんのお母さんですね？　じつは事件のことについて……」。このとき私ははつきり見た。この老母が痩せた体を、全身を震わせて何か言おうとしているのを。それまで家の内側からしか電光源が当たっていなかったため、つまり、お母さんの後ろから光が当たっていたため、目前にいながら私はこの人の顔をはつきりと認識していなかったのだ。それはまさしく幽鬼そのものであった。この人は怒っている……。それはたしかに怒りの燐光だった。

そして、老母は、私に向かってこう告げた。「なぜ、うちの子たちだけがあんな仕打ちを受けなければいけなかったのでしょうか？」その言葉を聞いて、私を感じたことは、前にも記したとおりである。私はこの言葉を見聞きしたあと、一拍置くかたちで最敬礼をし、先ほど用意した名刺だけを手わたし、そこを辞した。じつは、この最後の行為については記憶がややふやである。慌てていたのかもしれない。ただ、そのとき用意した名刺が、その後たしかになくなっていった。

「鬼の言葉」

私は正義漢でもなんでもない。たまたまマスメディアの仕事をしているが、取材にはなるべく自分の感情を挿しはさまないようにしていた。そうすることによって客観的報道を遵守しているつもりだった。多くのメディア関係者は、私と同じような考え方と行動をしている

はずである。

しかし私はこの老母の言葉で、それまでの姿勢を変えることにした。一個人の仕事のやり方を変えるほどのショッキングな言葉だった。そして同時に、ある書物のタイトルを頭に浮かべていた。

江戸川乱歩の「鬼の言葉」。内容はともあれ、私はたった今、現実の「鬼の言葉」を投げつけられた。「鬼の言葉」とは、そのタイトルだけとつてみればじつに秀逸で意味深だ。私はこの乱歩の随筆集のタイトルに執拗にこだわった。それだけ老母の言葉、態度にそのタイトルが一致していたのである。私が二〇〇〇年一月三〇日深夜に発生した未曾有の大事事件、世田谷一家殺害事件の取材に本腰を入れることをあらためて決心したが、この二月の寒い晩だった。

私が訪ねていったのは、同事件の被害者である宮澤みきおさんの実家、つまりみきおさんの御尊父である宮澤良行さんの自宅である。先に記した「お父さん」は宮澤良行さんであり、「お母さん」がみきおさんの御母堂である。御母堂の「鬼の言葉」はそれから私の取材の節目ごとに必ず脳髓に蘇ってきた。

私はこの御母堂の言葉を忘れない。もちろん、御母堂だけでなく、「お父さん」つまり宮澤良行さんのこともつねに考えていた。この御母堂への取材のあと、良行さんには数回、取材をさせていただいた。私は、良行さんから、なにがしかのコメントを得るようなまねは、